

第2課 家庭で

1. この課のねらい

- (1) 家庭で、日常使われる基本的なあいさつの言葉が言えるようにする。
- (2) 食事の習慣の日本と中国の差を知らせ、日本式の礼儀作法とあいさつ言葉の使用が、自然な動作や表情などを伴ってできるようにする。
- (3) 外出するときや帰ってきたときのあいさつを習慣付ける。

2. 学習項目とその扱い方

〔会話一〕

(1) 学習項目表

| 区分 | 使用 | 理解 |
|-------|-----------------|-------------|
| 最重要項目 | ○はい、すぐ 行きます。(2) | ○ごはんですよ。(1) |

(2) 準備

①会話の内容をかえた自作のテープ（以下「応用会話のテープ」という。）を用意する。テープには、状況や雰囲気を理解する助けとなるような音なども入れておくにより効果的である。

例1. 電話の音

A：電話ですよ。

B：はい、すぐ行きます。

例3. 水の音、風呂場の引き戸の音

A：お風呂ですよ。

B：はい、すぐ入ります。

例2. 八時を告げる時計の音

A：時間ですよ。

B：はい、すぐ起きます。

例4. 玄関を開ける音、応対の声

A：お友達ですよ。

B：はい、すぐ行きます。

②応用会話の中に出てくる新しい単語（「時間です」「起きます」「電話です」「お風呂です」「入ります」「お友達です」）は、できれば中国語訳を付けた語彙リストを作り、応用会話を聞かせるときに渡しておくといよい。ただし、ここでは文の形や使われる状況を習得させることが目的であって、それらの単語を覚えさせる必要はない。しかし、返事の「はい」はどうしても覚えさせなければならない。

(3) 導入

①まず、会話本文のテープを繰り返し聞かせる。予習をしてあるはずだが、もし必要

であれば、教科書の中の〔会話－1〕の翻訳の部分を見ながらテープを聞かせてもよい。
②その後、用意した応用会話のテープを聞かせる。この際、学習者に対して、たとえば言葉が分からなくても、自然な形で教授者が「もう一度、テープを聞いてみましょう」とか、にっこりほほえみながら「分かりましたね」と言ってもよい。

ただし、未知の言葉を使いすぎると、学習者が混乱するので注意したい。

(4) 練習

①まず、会話本文のテープの中の第一の発声「ごはんですよ」を聞かせ、それを学習者に繰り返させる。普通は学習者の発話（すなわちこの教科書では一般に林さんの発話）を練習させることが目的なのだが、ここでは「ごはんですよ」の形は学習者も使用できるのでこれも繰り返して練習させる。「テープにならって言ってください」という指示の言葉は、第5部の「指示表現集」の中に中国語訳があるので、その中国語を厚目の紙（カード）に大きく書いて、用意しておき、学習者に見せるようにしてもよい。ただし、そのときには必ず「テープにならって言ってください」という言葉を添えるようにしたい。そうすれば、何回か繰り返すうちに、学習者が覚えるので、そのカードを見せなくても済むようになる。いつまでも学習者が、中国語に頼る癖を付けるのはよくないので、なるべく日本語だけの指示にしていきたい。

②その後、教授者が発話して学習者に繰り返させる。指示の言葉については、①と同様である。そのときに発音の悪い者には、なるべく正確に教授者のまねをさせることによって直す。言葉の調子（イントネーション）も自然な日本語の調子になるように注意する。なるべく教授者と同じように発話できるようになるまで繰り返したいが、口の回らない学習者に何度も繰り返させると、学習者が自信をなくすことがあるので、学習者が何人かいる場合は、いったん別の学習者に当てて、また後で前の学習者に戻るといった形にしたい。林さんの発話の「はい、すぐ行きます」も同様に行く。学習者が教授者のまねがすぐできて、のみ込みの早い学習者であれば、応用会話も同じように繰り返させてもよいが、日本語の発音に慣れず、なかなか口が回らない学習者の場合には、応用会話は繰り返させない方がよい。この段階では、何よりも学習者に楽しく日本語を勉強させることが大事なので、教授者も固くならず和やかな雰囲気練習を行うことが大切である。たとえば、学習者が日本語らしい発話ができなくても、少しでも進歩が見られればほめてやりたい。

〔会話一 2〕

(1) 学習項目表

| 区分 | 使用 | 理解 |
|-------|----------------------------------|---------------|
| 最重要項目 | ○おはようございます。(1) ○はい、すぐ 来ます。(3) | ○おはよう。正道は。(2) |

(2) 準備

場面練習をするために、学習者が一人の場合は、もう一人手伝ってくれる人を探して頼んでおくとよい。

(3) 導入

〔会話一 1〕と同様に行う。テープを聞いて繰り返させたり、教授者の発話に倣って繰り返させたりする。やり方は〔会話一 1〕と同様。ただし、「おはよう。正道は」という形は理解項目であり、この段階では繰り返させる練習はしない方がよい。

(4) 練習

①〔会話一 1〕と同様に練習した後で、場面練習を行う。学習者を教室の外に出して、教授者が、中から呼び〔会話一 1〕と〔会話一 2〕を続けて練習する。

練習例 A：ごはんですよ。
B：はい、すぐ行きます。
(教室内に入り)
B：おはようございます。
A：おはよう。〇〇さんは。
B：はい、すぐ来ます。
(次の学習者を呼ぶ)
A：〇〇さん、ごはんですよ。

外にいる学習者を次々に呼んで、会話練習を行う。

②次に、〔2. 表現練習 a〕を行う。これは、教科書を開かせて、その箇所を見ながら教授者が発話し、それを繰り返させる形で行う。

こういう練習をするときは、教科書の順序どおりに1から10までやるだけでなく、順序をかえて発話させる。学習者が複数いるときには、座っている順番に当てるよりも順不同に指名する方がよい。

よくできる学習者には、中国語訳をカードに書いておいて、それを見せて日本語に直して発話させる形で練習させてもよい。このように学習者に手掛かりとして見せ、

すぐに答えの日本語を発話させるために作ったカードを「フラッシュカード」という。

フラッシュカードを使うのは、短い時間で手掛かりを見せて反応させ、頭の中で考えなくても、すぐに口から答えが出てくるように訓練するためである。(教科書第2課の〔1. 会話練習〕の「スーパー」「郵便局」など、〔2. 表現練習b〕の「帰ります」「食べます」などのように、学習者に与えて入れかえさせる手掛かりとしての語彙や表現などを「キュー」という。キューは、教授者が発話したり、実物や絵で示したり、フラッシュカードで与えたり、いろいろな出し方がある。) なお、〔2. 表現練習b、c、d〕は、〔会話-6〕で練習するので、ここでは行わない。

〔会話-3〕

(1) 学習項目表

| 区分 | 使 用 | 理 解 |
|-------|----------------------------|---------|
| 最重要項目 | ○いただきます。(1) ○ごちそうさま。(3) | |
| 重要項目 | | ○はい。(2) |

(2) 準備

家庭の食事場面の写真を用意する。

(3) 導入

〔会話-1〕と同様に行う。

(4) 練習

①会話本文のテープを繰り返させたり、教授者の発話に付いて言わせたりして、自然に言えるようになるまで練習する。「いただきます」の発音に注意させ、「いただきます」「ごちそうさま」が、自然に言えるようにする。

②このような言葉は、学習者と食事する機会があれば、できるだけ使用するように心掛ける。なるべく実際の場面を使って練習をさせることが大切なので、そういう機会を意識的に作るようにしたい。

〔会話－４〕

(1) 学習項目表

| 区分 | 使 用 | 理 解 |
|-------|---|--|
| 最重要項目 | ○ちょっと 銀行へ 行ってきます。 (1) ○行ってきます。(3) | ○はい。(2) ○行ってらっしゃい。気をつけて。 (4) |

(2) 準備

①〔1. 会話練習〕を応用会話として利用し、そのテープを使う。その場合、例えば「スーパー」のかわりに、近所のスーパーや店の名前を入れたり、「田中さんのうち」のかわりに学習者の知っている人の名前を入れて、応用会話のテープを作るとなおい。

応用会話を作るときには、なるべく学習者が実際に接する題材を利用するようにしたい。

②美容院、たばこ屋、郵便局、銀行などの絵や写真を用意する。

(3) 導入

会話本文のテープを聞く。学習者の反応がよければ、応用会話のテープを聞かせてもよいが、無理は禁物である。

(4) 練習

〔会話－３〕までの練習と同様に行う。

〔会話－５〕

(1) 学習項目表

| 区分 | 使 用 | 理 解 |
|-------|-----------|-------------|
| 最重要項目 | ○ただいま。(1) | ○お帰りなさい。(2) |

(2) 準備

(3) 導入

〔会話－３〕に準じて行う。

(4) 練習

〔会話—6〕

(1) 学習項目表

| 区分 | 使用 | 理解 |
|-------|-----------------------------|---|
| 最重要項目 | ○お砂糖は。(1) ○たばこ、吸いますか。(3) | ○はい、お願いします。(2) ○いいえ、たばこは 吸いません。 (4) |

(2) 準備

場面練習をするためのために、お盆、コーヒー、砂糖、ミルク、たばこなどを実際に用意し、教室の机も練習がしやすいように並べる。

(3) 導入

今までと同様にテープを聞かせて導入する。この会話に現れる文は全て重要な表現なので、繰り返し発話の練習をする。

(4) 練習

①今までと同様に行う。〔2. 表現練習 b、c、d〕を行う。テープを利用して、そのまま練習してもよいが、最初のうちは、テープのスピードに付いていけないおそれがあるので、その場合には、教授者がキューを出して学習者に答えさせる。

しかし、最終的には、テープを使って一人で練習ができるようにしたい。こういうキューを与えて学習者にすぐ反応させる練習は、学習者が頭で考えなくて、機械的に正しい形が口から出るようにすることが目的である。

②その後、場面を作って場面練習をする。もし、学習者に余裕があれば、次のような練習をさせてもよい。新出語彙は、前もって用意した写真あるいは絵を見せるか、語彙リストを作って練習をするときに渡した方がよい。

練習例：下線の部分を入れかえて練習しなさい。最初“はい”で練習して、次に“いいえ”で練習する。「～ますか」のイントネーションに気を付けること。

A：たばこ、吸いますか。

A：たばこ、吸いますか。

B：はい、吸います。

B：いいえ、たばこは吸いません。

1. ビール、飲みます 2. さしみ、食べます 3. テレビ、見ます

(ビール、さしみ……などの新しい語彙を使って練習してもよい。この場合は、写真などを用意する。)

〔会話一 7〕

(1) 学習項目表

| 区分 | 使用 | 理解 |
|-------|--------------|--------------|
| 最重要項目 | 〇おやすみなさい。(1) | 〇おやすみなさい。(2) |

(2) 準備

(3) 導入 } 〔会話一 3〕に準じて行う。

(4) 練習

3. 文型・文法に関する参考事項

- ①この課は、動詞の「ます形」の学習が中心である。動詞の数は、学習者のレベルによって調節する。「ます形」は、必ずしも現在を表すわけではないことに注意する。「毎日、学校へ行きます」は習慣的行為、「これから、学校へ行きます」は未来の意を表す。
- ②「こんにちは」「こんばんは」は、家族内では言わないことに注意する。〔関連表現〕(教科書P.34)に、家族呼称が出ているが、身内の呼び方に注意する。また、家族の名前などを使って、第1課の紹介の練習などに戻ってもよい。